

「資料紹介」

図書資料部の近着資料のなかから数点を選んで紹介します。その他の近着資料については『アジア経済資料月報』をご覧ください。

末原達郎著：熱帯アフリカの食糧生産 東京 同朋舎 1990年 334p.

本書は、ザイールを主たる対象として10年以上にわたりアフリカ農業の研究を続けてきた著者が、これまでの成果をまとめる形で公刊したものである。

本書は、著者の長年にわたるフィールドワークに立脚し、それによってアフリカ農業の生産局面における特質を見事に浮き彫りにしている。アフリカにおいて農業は、もっとも重要な経済活動であり、人々の生活を支える根源であり、同時に現在の経済危機の基本的要因でもある。こうした重要性にもかかわらず、日本において自らの調査に基づく独自の資料に依拠した農業研究は少ない。アフリカ諸国の農業統計が多くの場合信頼性にかけるものであることを考えるとき、自らのデータをもつことの重要性は繰り返し強調される必要がある。アフリカ農業を理解するためには、この種の研究の積み重ね以外に道はないが、残念ながら日本においてはこうした研究がまとまった形で公刊された例は、池野旬『ウカンパニ』（アジア経済研究所 1989年）などきわめてわずかなものにすぎない。その意味で、日本のアフリカ農業研究において本書の持つ意義は非常に大きい。

また、本書はザイール東部のテンボ人を中心に扱いつつながら、より市場指向の強いバシ人、そしてより自給自足指向の強いレガ人との比較によって、それぞれの農業のタイプを明瞭にすることに成功している。テンボ人農業に関する綿密な調査によってアフリカの焼畑農業システムが詳細に説明される一方、バシ、レガの

農業との比較により、それが世界資本主義に接触した場合の変容過程についても考察されている。

このようなミクロの調査に基づきながら、本書はアフリカ農業の概観にも一章をさいており、アフリカ農業の入門書としても読むことができる。その「危機」ばかりが喧伝される傾向にあるアフリカ農業についての、地に足がついた研究成果として、本書が広く読まれることを期待したい。

(武内進一)

ブルース、ジェームズ著、長島信弘、石川由美〔共〕訳： ナイル探検 東京 岩波書店 1991年 635p. (17・18世紀大旅行記叢書10)

ジェームズ・ブルースは1730年スコットランドの貴族の家に生まれた。再婚した父の配慮でロンドンのハロー校で学んだが、病気がちになり、専門学校でフランス語などの言語とフェンシングを学んだのち、貿易商を志す。その頃訪れたスペインで、南部に残るムーア人とイスラムの文化に興味を持ちアラビア語を学ぶ。その後アビシニア語をはじめとする東方諸言語への知識も深めていたところ、父の死後相続した領地の石炭で富を得て、アフリカへ旅したいと思い準備することになる。

アルジェの執政職に任じられることになり、彼は数学と天文学の勉強に励む。途中イタリアでは古代建築と描画を学んでアルジェに向かう。アルジェではアラビア語に習熟し、熱帯病や外科手術をはじめとする医学の知識も身につけた。そして、足掛6年に及ぶナイル川水源への旅が1768年に始まる。荷物は天体観測器

具、エチオピアに関する資料の切り抜き、医薬品から武器、筆記用具に至る膨大な量に加えて種々の立場の首長たちの紹介状、信用状も用意していた。名前もヤゴウベ・エル・ハキムと改めアラブ人の服装をしてキリスト教徒の医師であり修行者であると説明することにした。

本書は帰国後16年してようやく公表された旅行記全5巻(全8書から成る)の翻訳である(一部抄訳)。読み始めてまず感心させられるのは著者の知識の豊富さである。体力、気力のみでは到底成し遂げられる旅ではないのである。途中、命を危うくすることも度々だったが、著者の偏見のないものの見方と知識を駆使して無事乗り越えていく。アビシニアでもその知識ゆえに宮廷で重宝がられ帰国の許可がなかなか得られなかったという。

この本は探検記というよりは博物史、民族史、政治史、史誌、地誌、現代でいうフィールドワークである。アビシニア(エチオピア)に特に興味を持っていないくても、著者の文化・習俗に対する相対的、客観的な分析と軽快な文体は読者を引きつけるであろう。

(鈴木陽子)

ステファン・ライト、ジャニス・N・ブラウンフット編、青木一能訳： 変貌するアフリカ——政治経済システムの自立と国際関係—— 東京 芦書房 1990年 364p.

1984年5月ロンドン大学英連邦研究所で開催された「世界政治のなかのアフリカ」と題する学術会議で発表された諸報告書を編集し、1987年にマクミラン社から刊行された同名の書物の翻訳である。多様な執筆者による15論文は、アフリカの置かれた困難な状況を、国際社会との関連で分析し、将来の展望への糸口をつかもうとする点で共通している。

編者が序章において「グローバルなシステムにおけるアフリカの位相に焦点を当てた」と述べているように、アフリカが国際社会へ、国際社会がアフリカへ、

それぞれ与えるインパクトを整理している。編者をはじめ他の寄稿者がほぼ一致して指摘している点は、独立当時のアフリカに寄せられた期待感が次第に根拠の乏しいものとなった現実である。非同盟主義、反アパルトヘイト闘争、新国際経済秩序、アフリカ・インド洋非核化などの新しい動きの中で、また地域的経済圏の形成において、アフリカならではの積極的貢献がなされなかったことについて、その原因が検討されている。

アフリカの影響力減退の理由として、アフリカの不安定性が大きな要素であり、それが植民地主義の産物であることを認めつつ、今後の展望となると、ほとんどの論文が悲観的である。ただ第3部の中の女性と政治を論じた部分では、女性の政治参加は着実に進んでおり、男女の関係の変化によって、生産の部門でも、国際的次元でも、現状が打開される可能性があり期待が持てることを示唆している。

寄稿者はイギリスを中心にした欧米の研究者やジャーナリストである。こうした学術会議にわれわれが参加する機会は少ないし、たとえ参加しても理解に不十分な点が残るのが普通であることを考えると、訳者の努力は貴重である。

(丹莖靖子)

ユベール・デシャン、木村正明訳： マダガスカル 白水社 1989年 179p.

山口洋一： マダガスカル——アフリカに一番近いアジアの国—— サイマル出版会 1991年 225p.

アフリカ大陸東南部の島嶼でありながら、アジア系の人々が住んでいることから、アフリカ大陸諸国とは比較的孤立化してきたマダガスカルについてはこれまであまり紹介されなかった。しかし、はからずも、いずれも行政官として現地に赴任した2人の著者による著作が出版された。デシャンは1920～30年代、山口氏は80年代に現地に駐在しているので、約半世紀の開きはあるが、ともにマダガスカルに傾倒している点は共

通している。

前者は行政職引退後、大学で教鞭をとっているデシャンが地理の教科書として執筆したものである。したがって、地勢、歴史、人口、社会制度、産物、経済など体系的叙述がなされているが、その叙述は長年の現地経験、現地調査に裏打されて説得力がある。また、終章にはマダガスカル各地の旅行案内もある。訳者あとがきにあるデシャンの略歴は興味深い。

後者は大使として赴任した同島で「時間を超越した」独特の文化的伝統に衝撃を受けた著者が、自然・人文科学者の意見も聴き、マダガスカルを総体的にとらえようとした試みである。ただし前者がさまざまな研究成果を踏まえながらも断断を避けているのに対し、後者はさまざまな点で断定を下しているのが気になる。たとえば、マダガスカルの祖先はポリネシア系であること、マダガスカル人の死生観として「先祖」になることが最大の目的であること、タイム・イズ・ノー・マネーなどである。しかし、前者が75年の社会主義革命までで終わっているのに対し、後者では革命後の経緯を述べた章や、日本との奇しき関係（たとえば日露戦争におけるバルチック艦隊の寄港など）や現在の経済協力関係を述べた部分は外交官としての目が行き届いている。

(林 見史)

岡倉登志：「野蛮」の発見——西欧近代化の見た
 アフリカ—— 東京 講談社 1990 241p. (講談社現代新書1031)

著者の主張していることは西欧近代化の歴史が、ギリシャ時代から連綿と続いてきた西欧以外の外部世界を「野蛮」と規定し、自らの世界を「外部」世界に押しつけることによって成立してきた、という点である。第1、第2章の記述はやや難解であるが、第3章から、著者の筆も走り出すようで、ようやくわれわれの射程距離に入ってくるように思える。まず探検家やそれに

続く宣教師のアフリカでの役割が描かれる。また、社会進化論についての記述では、アフリカ人を生物の分類として劣ったものとしてアフリカ支配を正当化してきたという。さらに、西欧が外部を「野蛮」と規定すること自体が、逆に西欧の「野蛮」性を見いだすことになるという点を示すことにも著者は成功している。

しかし、新書の250ページ程度の本であるが、読み通すのはかなり「しんどい」というのが読後の感覚である。全体として、歴史の紹介に終始し、各々の記述はよくできているのだが、「野蛮」という語自体に疑問を持ってしまうと、途端に著者のいう「野蛮」とは何かと考え込んでしまう。「野蛮」という語に定義を与えないで読む場合にはそれでよいかもしれない。「野蛮」という語にはなにか主観がつきまとうような気がしてならない。

評者が小学校の頃、尊敬する人として、シュバイツァーを上げる友人が多くいた。アフリカ人を劣等と考えていた時代は、ついこの間まで続いていたのである。

(井村 進)

秋葉幹人：アフリカ 東京 岩崎書店 1991年
 187p.

本書の著者は現職の高校教師であるが、第I章アフリカのあけぼの、第II章アフリカの文化を築いた人びと、第III章アフリカ王国の発展と崩壊、第IV章独立をめざして、および第V章現代のアフリカ、という目次からも推測できるように、古代から現代にいたるアフリカの歴史をコンパクトにまとめた中学生から高校生を対象にした学習参考書である。

本文の難しい漢字にはフリガナが付けられ、各ページには地図や図表、写真とか挿絵なども豊富に使われており学生や生徒でも比較的容易にアフリカの歴史の流れを理解することができるように工夫されている。

このような中学生や高校生を対象としたアフリカ史に関する入門書は、類書が少ないというだけでなく、

わが国の生徒や学生にアフリカへの関心と興味を喚起するという点においても、きわめて貴重なものであり、多くの若い読者に親しまれることを期待したい。

それにもかかわらず、やさしく表現することに重点が置かれたためか、それとも専門のアフリカ研究者による監修が省略されたためか、歴史書としては致命的とも思われる事実に関する誤りが散見されるのは実に残念である。

たとえば、西アフリカのイギリス領植民地「黄金海岸」は1957年の独立時点では共和国でなく、1960年にはじめて共和国に移行したにもかかわらず、本書では「黄金海岸は、ガーナ共和国として独立した」(151ページ)という記述がある。

さらに、「しかし、国民の不満に乗じた軍隊が、独立に反対するヨーロッパ諸国の援助と、土地の共有などの農業改革に不満をもつ首長の協力をえて、クーデターをおこした。エンクルマは首相の座をおわれ、ギニアに亡命した」(153ページ)と説明されているが、1966年2月の軍事クーデターによってエンクルマが失ったのは「大統領」の地位であって「首相」の座ではなかったし、エンクルマが実施した農業改革の中心は伝統的な部族共同体による共有地の「国有化」であった。

(細見真也)

椎名誠著： あやしい探検隊アフリカ乱入 東京山と溪谷社 1990年 210p.

4月に入った頃からだろうか、書店の売上ランキングの上位に「アフリカ」本が登場するようになった。本書、椎名誠著『あやしい探検隊アフリカ乱入』(山と溪谷社)である。

そもそもアフリカ関係の書籍は、そのほとんどが発行部数からして控え目であり、見つけた瞬間に買わないとその後二度と出会えないという一期一会的存在である(ことが多い)。その中に混じってのベストセラーであるから、やはり人気者椎名氏の力は偉大である。

では、その椎名氏にとってのアフリカとは一体なんだろうか。冒頭、彼は「(自分とその仲間)バカたちだから詳しいことはあまりよくわかっていない」と前置きしたうえで、

アフリカといったらサバンナと野生動物とマサイである。

と言いきる。椎名氏は、「リビングストーンの『アフリカ探検記』やピントーの『ニジェール川紀行』を読み、マサイ族の激しくも悲しみに満ちた凶暴な生き方および暮らし方を知り、ぜひともその雄姿をこの目で見なかった」し、「サバンナでキリンさんを見ながらウイスキーを飲み、アフリカの東海岸へ行って青い海を見ながらビールを飲みたかった」らしいのである。

この希望一覧表を胸に彼は、アフリカ(細かく言えば、ケニアとタンザニアである)に赴くのだが、感心させられるのは、彼が希望をかなえる以外の「余分なこと」をちっとも考えないところである(いや本当は違うのかも知れないが、本には出てこないのだ)。たとえば彼は、観光案内人と化したマサイと話をしているも、開発によって変わっていく人々の暮らしを嘆いてみたりはしない。また、サバンナで動物を眺めながらビールを飲むと言ったら、本当にひたすらビールを飲む。その結果、「椎名氏のアフリカ」では、マサイはあくまで憧れたとおりの雄々しいマサイであり、野生動物たちはゆったりと暮らし、人々と共存していることになる。

枕の下に写真を敷いて眠るとその写真の夢を見ることができると言うが、ここに書いてあることは、実は椎名氏がマサイと動物とビールの写真を敷いて見た夢の話なのではなからうか——本書で展開されるのは、そんなことを眩きたくなるほど完ぺきな出来映えの、アフリカ版シーナ・ワールドである。

(津田みわ)